

電子楽器を活用した創作活動の試み  
—日本の音階への動機づけを出発点として—

多 田 愉 可

Creative Activity Trial using Electronic Musical Instrument  
—Increasing Student Interest in Japanese Musical Scales—

Yuka Tada

Through students' musical creative activities, instructors should allow each student to develop his or her own personality and creativity and to awaken his or her sensitivity through a variety of discoveries using different musical components. Instructors should also lead students to realize the great value of music. They should motivate students to cultivate their aesthetic sentiments to the maximum level, which is the essence of music education at school. Without a doubt, music education has become even more important due to rises in psychological problems or disorders in society.

The trial experiment itself involves the use of electronic musical instruments in order to make it easy for the students to try creative activities using Japanese musical scales. In this experiment the instructor also encourages students to gain more interest in Japanese musical scales and at the same time to be enthusiastically engaged in creative activities.

キーワード

創作活動 Creative Activity, 日本音階 Japanese musical scales,  
電子楽器 Electronic musical Instrument

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University  
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 音楽学科 Department of Music

## I 緒 言

### I-1 中等科音楽における創作活動

中等科音楽におけるカリキュラムの中で創作活動はどのように位置づけられるのであろうか。今日、国家または州などによって定められたカリキュラムの内容が明らかになっている30数か国のほとんどすべてに、何らかの形で「創作」活動が取り入れられ、それは欧米諸国はもとより、中国、韓国をはじめとするアジア諸外国にも広がっている。<sup>1)</sup> わが国では1989年告示の学習指導要領において、小・中・高いずれにも音楽を作る活動を取り入れ、音楽教育がこれまでの技術習得を中心とした音楽教育から創造的な表現や、自己実現を大切にした教科へと転

換しつつある。音楽Iにおける創作に関する指導事項においては、実際の音を組み合わせにより音楽を作り出す創作活動を通し、音楽体験を豊かにし、また、表現しようとする意欲を育てるとともに、創造的な表現の能力を伸ばすことをねらいとしている。高等学校学習指導要領では、とくに創作する上で「イメージをもって」音楽を作ることを重視し、機械的な活動で終わることなく思いや意図をもって創作するよう指示している。音楽を形作る要素を知覚し、それらの働きを感受し音楽を作ることを目指す上で、旋律の基となる音階の構成音に注目し、特徴のある音階を選択させることによって、「イメージ」を持った活動へ展開させやすいと考える。平成20年の中教審答申には小学校から

高等学校を通して伝統音楽の一層の重視が強調された。特に高等学校学習指導要領では、創作活動の取扱いとして、我が国の伝統的な音楽の特徴を生かした作曲についても取り扱うように示されている。日本の伝統音楽の特質に根ざした学習としても、日本特有の音階を取り上げることは有意義であろう。日本音階を使用した創作活動を通して、日本音階の特徴を知ることができ、音楽の基となる音階を知ることによって音楽を深く味わうことにつながっていくと考える。また、旋律を作る際に、音階に加え音色を選択することはイメージをもって音楽を作ることを可能とし、生徒自身の表現したい音楽により近づくことができると考える。

### I-2 創作指導の意義

学校教育における創作指導の意義は、音楽をつくる楽しさを体験させ、生徒一人一人の個性や創造性を伸ばすことにある。創作活動を通しての音楽を形づくる要素の多様な発見によって、生徒たちの感性は覚醒され、音楽における価値観は拡大されるであろう。筆者が行った、大学生へのアンケート調査によると、高校での音楽の授業において創作活動に取り組んだ経験があると答えた学生は28人中5人であった。学校における音楽教育の実際を考えると、合唱曲を使った発声や、楽器演奏技術の習得、音楽様式、楽典、音楽史等、知的な理解に関する学習が行われている一方で、創作活動は授業としてどのように進められるべきであるか、おそらく様々な工夫が必要となり取り組み方も様々である。いずれにせよ、創作活動は生徒一人一人が積極的に参加できる活動でなければならない。さらに、高等学校音楽科の学習指導要領では「創造的な活動を実現するためには、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じることが重要となる。」と示されており<sup>2)</sup>、創作指導においても、音楽の構成要素である音色、リズム、速度、旋律、などの理解へと繋げることが重要視される。

創作指導の留意点としては、創作することによる充実感や達成感をすべての生徒に体験させることが挙げられる。そもそも学校における音楽教育の本質は、豊かな音楽経験によって情緒的成長を質的かつ量的に伸ばすことにあり、個々の創造性を伸ばすことを目的とする創作活動は、生徒の持つ潜在的な能力を育むにはきわめて妥当な領域である。心の荒廃が叫ばれる現

代においては、自己表現を豊かにする音楽教育は特に重要であり、個性を生かした創作活動は、より重要となってくるであろう。平成20年に新学習指導要領改訂に伴う基本的な考え方が示され、音楽科の改善の基本方針や主な改善事項が新たに告示された。そこでは創作活動についての重要性に加え、我が国や郷土の伝統音楽に関して、次のように言及されている。「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。」<sup>3)</sup> さらに改善の具体的事項として、生徒の個性を生かした創造的な活動を行うと同時に、伝統音楽を含む音楽文化についての理解を重視すること等が挙げられている。個性を生かした創作活動において、民族音楽や現代音楽を取り入れることで、楽器の音色、表現の工夫への興味を喚起することが可能となる。本格的な作曲のためには和声学、対位法、楽式論などの音楽理論が必要であるが、生徒を対象にした創作指導では、専門的作曲活動の前段階にある即興表現、節づくり、響きづくりが学習の内容となるであろう。知識や技能にとらわれることなく、自分のイメージを音として表現し、それによって創作する喜びや面白さを体験させ、生徒一人一人が意欲的に創作活動に取り組めるよう授業を展開したい。指導者は生徒に創作への意欲を持たせることにより、音楽にめざめさせ、音楽を愛好する心を育むことを目指さなくてはならない。そこで、筆者が行った広島県立呉昭和高等学校での音楽の授業「電子楽器を活用した創作活動」の試みを一つのアイデアとして紹介し、考察する。

### I-3 創作条件の提示

創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では「音楽づくり」、中・高等学校では「創作」として示される。音楽あそびとしての創作活動から始まった小学校の創作活動は、中学校では旋律創作に発展する。教科書を例にあげると、『中学校の音楽1』（教育芸術社）<sup>4)</sup>では、「作曲をしよう」のタイトルで作詞・作曲の手順が説明されている。まず、短い詩を作るよう指示があり、続いてその詩に4拍子のリズムをつけ、そのリズムに合う旋律

を創作する。『中学校の音楽2, 3』<sup>5)</sup>においても同様である。『高校生の音楽1』<sup>6)</sup>では媒体(音)について考えさせ、「体で音をつくる」で、図形楽譜を作らせる。また、ドラムセットの音を声で模倣させ、既習曲のリズム伴奏として使うという例もある。高校での創作活動では幅広い分野での知識や技術が要求され、『高校音楽2』<sup>7)</sup>での創作活動はコード進行、形式について学び、作詞・作曲、さらに編曲によって作品を仕上げ、対旋律の創作に及んでいる。学習指導要領に挙げられている音楽Iにおける創作についての指導事項には、

- ア 音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や和音などを付けて、イメージをもって創造的に音楽をつくること。
- イ 音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成を工夫して、イメージをもって創造的に音楽をつくること。
- ウ 音楽を形づくっている要素の働きを変化させ、イメージをもって創造的に変奏や編曲をすること。
- エ 音楽を形づくっている要素とその働きを理解して音楽をつくること。

以上の4点が挙げられている。<sup>8)</sup> 創作指導をする上では、すべての生徒が創作の可能性を持っているという指導観に立ち、無理強いをしないことが重要である。さらに「即興的に音を出して、その音の質感を感じ取り、表現したい音楽のイメージを膨らませながら音の組み合わせを工夫し、その積み重ねや発展の結果として音楽が形づくられていく過程が極めて重要となる。記譜の指導に関しては5線紙だけではなく、文、字、絵、図、記号など、その音楽にふさわしい方法を用いるようにすることが大切である。また、コンピューターや録音機器などを活用した記録方法も考えられる。」<sup>9)</sup>と記され、実際に音を組み合わせ、試行錯誤しながら音楽を作り出すことの重要性が指摘されている。創作活動における記譜や読譜の力は必要ではあるが、学校教育の音楽の授業での限られた時間では十分にその力が身につけられていない現状があり、個人差もある。さらに、創作活動の目的である個性を生かした音による自己表現を目指し、指導者は生徒に苦手意識を持たせることなく、創作活動の授業を展開することが望ましいと考える。そこで電子楽器、MIDI楽器を活用し、自由な発想による創作活動を導入として、音色、リズムへの興味から生徒のイメージを膨らませ、取り組めるよう工夫をした電子楽器に

よる創作活動を試みた。学習指導要領にも示されているように、記譜の指導に関しては、五線譜だけでなく、コンピューターや録音機器などを活用した記録方法も推奨されている。生徒のイメージを作品として完成させることで、創作活動における自己表現を実現させ、それによって自主的な創作活動へと発展させ、表現しようとする意欲を育てるとともに、創造的な表現の能力を伸ばすことを目指したい。それを可能にしてくれる楽器が電子楽器であり、記譜、演奏技術に関わらず、即座にイメージを音にでき、個々のイメージする音楽により近付くことができる。創作において音を音楽へと構成していくことが求められるが、表現したい音楽のイメージを膨らませながらの音やリズムの組み合わせの工夫、その積み重ね、発展の結果として音楽が形づくられていくという過程がきわめて重要となる。そこで、創作の導入として音階、音色、リズムについて、民族音楽や現代音楽を通して学び、創作活動によって音楽の幅広い知識を身につけることを目指す。中でも、音階にはさまざまな種類があり、音楽は音階によって特徴づけられることを創作活動によって生徒一人一人が認識できるよう、創作の条件として音階をとりあげた。伝統音楽への興味をもたせるためにも、ここでは日本の音階を用いた創作活動を試みる。

## II 創作活動への導入

### II-1 指導の概要

活動内容としては、生徒一人一人の個性を大事に、自由な発想で行われ、活動の中で生徒が音楽の構成する要素に興味を持ちながら多様な展開がなされることが期待される。創作指導の意義は音楽を作る「創作」経験そのものにある。創作活動は鑑賞や演奏においても音の構成を再認識することにつながる活動であり、生徒たちの音楽への意識を高めるきっかけとなるであろう。

本格的な作曲とは違い、音の使い方に関する一定の枠組みのもとにイメージを持った即興的表現、その発展としての音やリズムの組み合わせによって個性のある作品を目指す。その枠組みとして特徴ある音階、日本音階を使用した旋律作りを試みる。使用する音を限定することにより、その中での音のつながりや、特徴ある旋律を学ぶことができる。イメージを持たせるために、伝統楽器を含め、様々な音色による創作を可能とさせるためにシンセサイザーを用い

る。シンセサイザーを使用する李典は音色だけでなく、録音機能も備わっていることから、記譜の力に関わらず記録できる。多重録音も可能で応用もきき、創作には適していると考えられる。指導にあたっては曲の完成だけを目指すのではなく、その過程で音素材や構成原理の働きが音楽の表現にもたらす効果などについて生徒たちが気づいていくよう導くことが重要となる。

## II-2 電子楽器による創作

電子楽器とは電子音源を持っている楽器のことで、電子鍵盤楽器は学校音楽教育で使用される機会が多い。電子楽器はデジタル技術の発展とともに常に進化し続けている楽器であり、それらの活用は学校音楽教育の新たな展開につながっていくであろう。録音機能にも優れた電子鍵盤楽器のひとつであるシンセサイザーを使うことによって、記譜の力がない生徒にも音を記録することが可能となる。多様な音色を持つシンセサイザーは初心者でも容易に様々な楽器の音色を奏でることができ、イメージする音色の選択においても生徒が自由に行える。

## II-3 5音音階

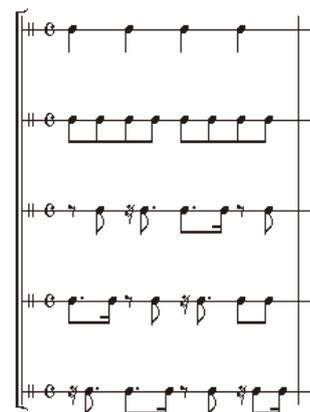
日本の音階については、教科書の中で陰音階、民謡音階、律音階、都節音階、琉球音階の5種類の音階が示されている。5音音階はオクターヴ内に5音を持つ音階で、その各音間の音程構成にはさまざまな組み合わせがある。日本や中国をはじめ、アジア諸地域からアフリカ、ヨーロッパ（ハンガリー、スコットランドなど）に至る世界のきわめて広い範囲にこの傾向が認められると言われている<sup>10)</sup>。創作活動に5音音階を用いる利点としては、5音を並べることで旋律的かつ、特徴的な音楽を創作することが可能であり、対旋律を考える上で不協和になりにくいことにある。また、記譜、読譜の力がない生徒にとっても限定された5音であれば、数字を用いるなどの工夫により音を表記することが可能である。5音に限定されることによって、初めて創作する生徒にとっても取り組みやすく、創作された旋律は理解し易い。指導者は生徒に創作に対する苦手意識を持たせることなく、次の創作へと発展させることが可能と考える。

## II-4 音色とリズム

5音によって作られた旋律をもとに、学習指導要領にも挙げられているように、対旋律やリ

ズムを組み合わせることによって、創造的に音楽を作ることを目指す。その際、指導事項の中にある「イメージをもって」創作することが重要となる。創作のためのイメージを膨らませる要素として、表現媒体である音、音色がある。創作に入る以前に、交響曲、協奏曲、オペラなどのヨーロッパ芸術音楽、日本の伝統音楽の鑑賞を通して教科書にある管楽器、弦楽器、打楽器の音色については十分周知する必要がある。加えて、その他の民族楽器の音色を知るために、民族音楽の鑑賞によって、幅広い音楽に興味を持たせるとともに、音色からのイメージを感じとらせる。リズムについても同様であり、バリ島やアフリカの民族音楽により、打楽器でのリズムの繰り返しや、それを組み合わせることができるリズムパターンをリズム譜によって理解する。次のバリ島のケチャックのリズムなどはきわめて妥当な教材と言えるだろう。

(譜1) バリ島 ケチャックのリズム<sup>7)</sup>



筆者はリズムの組み合わせでできるアンサンブルや、ドラムセットを活用し、リズムの組み合わせがもたらす効果を生徒一人一人に体験させた。同時に、生徒のリズム譜を読む力、テンポを保持する力等、リズムの基礎を身につけさせる方法として、高校生28人（14人×2クラス）を対象にドラムセットを使用し、8ビート（譜2）のリズム練習を行った。両手両足でそれぞれ異なるリズムを打つドラムセットは一人で

(譜2) 8ビート



のリズムの組み合わせを体験する上できわめて有効である。

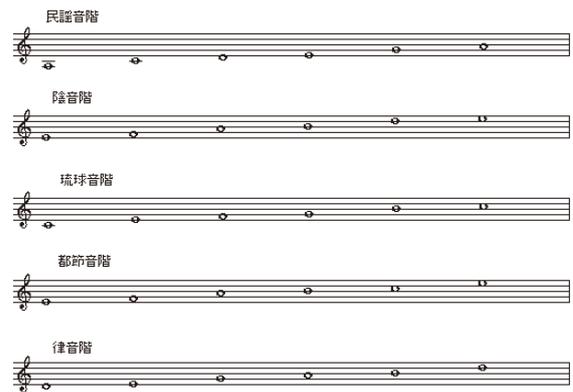
個人差はあるものの、短期間で全員が8ビートを習得することができた。他の楽器（鍵盤楽器、リコーダー等）と比較すると、音程のない打楽器は生徒たちにとって取り組みやすく、理解しやすい。日常的にさまざまな音楽、とくにポップス音楽を聴いている中高生にとって、ドラムセットへの関心は高い。また、リズムへの関心を通して、日本の音楽について理解を深めることを目指した。日本の伝統的なリズムの一つである拍節的なリズムのもっとも単純な形は、わらべ歌に現れている。そのリズムは、日本語の言葉のリズムそのものであり、生徒にとって受け入れることはきわめて容易である。わらべ歌の旋律を通して、その音階、リズムについて理解することは日本の音楽への理解を深めることへの手がかりと考える。

作曲がデザインに近付きつつある現代、学校教育での電子楽器を活用した創作は今日的課題の一つである。今回の試みで使用したヤマハ Motif は高品位でバリエーション豊かな音色を内蔵し、録音、編集機能を持つシンセサイザーである。また、生徒の個性を十分生かすための豊富な音色を備えている。シンセサイザーは楽器音を理論的に扱い、音楽要素を電気的な制御によってさまざまな音色に変換するものである。シンセサイザーは一般的に音楽要素をピッチ（音高）、ハーモニクス（倍音構成）、エンベロープ（時間変化）で構成し、電気回路に置き換えることで楽器音を合成している。MIDI への入力方法には通常リアルタイム入力とステップ入力を用意されている。リアルタイム入力は MIDI 楽器を演奏することにより、出力される MIDI メッセージをテープレコーダーのように録音する。ステップ入力は1音1音をデータ入力していく方法で、確実に入力できる。5音音階で旋律を創作し、さらに対旋律や、リズムパターンを創作する際、実際の音にしなから多重録音によるイメージ作りが可能で、記譜や読譜の力に関係なく、創作の可能性を広げるために有効である。

### III 実践

#### III-1 創作

(1) 最初に、5音音階を民謡音階、陰音階、琉球音階、都節音階、律音階の5種類の中から選ぶ。



- (2) 選んだ音階を5線紙へ記譜をする。生徒一人一人にキーボードを与え、音の並びを考えさせる。4分の4拍子とする。その際に、音色を決め、その楽器をイメージした旋律作りを目指す。
- (3) 16小節の旋律をイメージする。記譜と演奏技術の力に関わらず、MIDI 楽器へのステップ入力により、旋律を音にする。入力した旋律を即座に聴きながら、音の並びが不自然になっていないか、イメージ通りの旋律であるか、修正しながら仕上げていく。留意点としては、オクターヴを越える跳躍は避け、歌える範囲の自然な音の並びを意識させる。
- (4) 16小節の旋律に対する、リズムパターン、対旋律を考える。4小節のリズムパターン、あるいは対旋律を4回繰り返し、16小節の旋律と合わせる。旋律にリズム、対旋律を重ねることで、リズム、対旋律がもたらす効果を考える。その際、リズム、対旋律を最大で5パート（5トラック）作成する。16小節の旋律を創作する際に決めた音色により、リズム、対旋律の創作を試み、音色選びをする。リズム楽器の音色によっては、同じリズムを重ねる効果もねらえるが、できるだけ異なるリズムの組み合わせを楽しめるリズム譜の作成に心がける。テンポの設定も行う。
- (5) ステップ入力と多重録音により創作したリズム、対旋律を修正する。ステップ入力とはデータを入力することで音にすることであり、演奏技術に関わらず、自分で創作したものを音にすることが可能である。即時に音を聴き、修正可能で豊富な音色からイメージする音を組み合わせることができる。留意点としては8分割された四分音符への理解を持って、リズムの打ち込みができるよう、あらかじめステップ入力画面について学ぶことである。最後にこのようにして完成した生徒の作品を

鑑賞する。使われている音階、音色、リズムについて特徴をあげながら、作品を分析することによって音階への認識を高める。

### Ⅲ-2 作品例

次に異なる音階から一つずつ、生徒の作品を紹介する。

- (1) 琉球音階（ドーミーファーソーシード）を選んだ生徒の作品



4回くり返されるリズム，対旋律



- (2) 陰音階（ミーファーラーシーレーミ）を選んだ生徒の作品



4回くり返されるリズム，対旋律



- (3) 民謡音階（ラードーレーミーソーラ）を選んだ生徒の作品



創作した旋律



4回くり返されるリズム，対旋律



## Ⅳ 結果と考察

- (1) 音色について

箏、笙、箏、三線、三味線、等の和楽器の音色を旋律に使う生徒がほとんどであった。その他としては、生徒自身の経験のある楽器、例えば、ピアノ、管楽器を選択している。対旋律に選ぶ音色についても同様である。日本の音階に和楽器を使う生徒が多いことから、和楽器の響きと日本音階を結びつけ、イメージを持って創作していると考えられる。

## (2) リズムについて

四分音符と八分音符の組み合わせが圧倒的に多く、休符を使う生徒は多くない。四分音符と八分音符の組み合わせはわたしたちが普段使っている日本語のリズムと関わりがあり、生徒にとって親しみやすいリズムであると考えられる。また、単純なリズムの組み合わせでありながら、音色を変えることで、音の組み合わせから生まれる響きの面白さを創作から知ることができた。

## (3) 音階

28人のうち11人が琉球音階、6人が陰音階、4人が陽音階、その他（四七抜き音階等）7人であった。琉球音階は生徒にとって特徴を強く感じる音階と言える。

他の音階に比べ、テトラコードに関わらず、音階の特徴を表し易いと考えられる。この創作においては、テトラコード等、本来のルールに拘束されない自由な創作を奨励しながらも、結果的には3人の生徒は、ほぼルールに従った創作となった。1人は陰音階、2人は琉球音階である。

創作活動においては、あくまでも生徒の自由なイメージの表現を重視したいが、日本音楽の持つ音階の特徴を知ること、さらに日本音楽への理解と感性を深めることができるであろう。

5音音階を使い、自由な発想のもと創作活動をさせた結果、本来の5音音階が持つ規則には当てはまらない旋律ではあるものの、終止音を変えることでテトラコードを生かした旋律になるものもあった。譜3に見るように、ラーレ、ミーラの音程が完全4度となり、その中に中間音がある。民謡のテトラコードが旋律の中でうまく使われていればその音階のもつ特徴を表すことができ、旋法となる。民謡のテトラコードは中間音と完全4度の上端の音との音程が長2

度である。また、律のテトラコードは中間音と完全4度の下端の音との音程が長2度、琉球のテトラコードは中間音と完全4度の上端の音との音程が短2度、都節のテトラコードは中間音と完全4度の下端の音との音程が短2度である。

## (譜4)

譜例4の旋律に使われているテトラコードはレーソが中心であり、次いでラーレが使用されている。しかし、民謡音階に従えば、レーファソ、ラードーレが適当であると考えられる。ミの音をファに変更することによって民謡音階らしい旋律となり、終止音ラをソに変え、終止音の前の音「ド」に核音であるレを付け加えることで安定した終止形をとることができる。旋律につけるリズムは、例えば8分音符の四つの連続ではテトラコードを無視した形とならないよう、同じ音の連続を使用する、あるいはリズムを変え、それぞれのテトラコードが単位となるよう創作すれば、より民謡音階の特徴は明瞭となる。

## (譜3)



陰音階（ミーファーラーシーレーミ）を使った生徒の創作はミーラ、シーミがそれぞれ完全4度となる。

ミーラが中心となっており、ここでは旋法的に相応しい旋律となっている。ただし、終止音については核音でないために、落ち着かない終止形となっている。核音のラで終わると安定する。

沖縄音階を使った生徒の作品をみていく。沖縄音階は他の日本音階に比べ特徴が強いので、どのように並べても沖縄音階らしい旋律となる。琉球のテトラコードを使った旋法で創作すれば、自然な動きをもつ、沖縄音階独特の旋律となる。



ドーファの完全4度と特徴づける中間音ミを単位としてリズムや音の並びを変えた例として次の譜を掲げる。

琉球のテトラコードがより明確になり、旋律が自然な流れとなる。琉球音階の特徴が一層強く現れると考える。



4回くり返されるリズム、対旋律



## V 結 語

心の荒廃が叫ばれる現代において、音楽教育は重要であり、生徒の個性を生かした創作活動は、これからの学校教育においてますます重要となり得る音楽活動である。今回は、音色の豊富な電子楽器を使うことで、生徒一人一人のイメージを膨らまし、表現したい音楽を創作する活動を取り上げた。また、使用する音を5音にすることで、取り組みやすい創作となり、自由な創作の中にも特徴のある旋律の創作を目指し、創作を通して日本の音階への意識を高め、日本の伝統音楽に対する興味へつなぐことができたと考える。5線紙に記譜をしながらの従来の創作活動に比べ、電子楽器のステップ入力を活用した創作活動は生徒全員が創作への興味を持ち、自主的に取り組む活動となった。電子楽器を活用した創作活動への試みにより、自由な表現による作曲を経験することで音楽への関心を高めることができたと考える。28人の生徒が創作活動の授業に積極的に取り組み、全員が作品を発表する目標は達成され、その後の作詞・作曲の課題に取り組むきっかけとなった。作品鑑賞において、生徒はそれぞれの作品に面白さ

を見つけ、音色の違い、リズムの組み合わせ、さらに5音音階について認識を持ち、創作活動を通して日本の音階への理解を深めることができたと思われる。日本の音階を使うことで音階への意識を深め、創作した5音音階の旋律と各音階による作品例を比較して聴き、本来の音階の持つ特色が理解できるよう発展させる試みである。

## VI 注

- 1) 中等科音楽教育研究会編『中等科音楽教育法』音楽之友社, 2011, p.180
- 2) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説芸術編』教育出版, 2009, pp.17-20
- 3) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説芸術編』教育出版, 2009, p.4
- 4) 教育芸術社編集部『中学生の音楽1』教育芸術社
- 5) 教育芸術社編集部『中学生の音楽2・3』教育芸術社, 2009, p.30
- 6) 山本文茂編『高校生の音楽1』音楽之友社, 2008, p.30
- 7) 山本文茂編『高校生の音楽2』音楽之友社, 2005, p.88
- 8) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説芸術編』教育出版, 2009, p.17
- 9) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説芸術編』教育出版, 2009, p.18
- 10) 藤井知明, 水野信男, 山口修, 櫻井哲男, 塚田健一『民族音楽概論』東京書籍株式会社, 1994, p.43